

## 中神琴溪 医案⑤

城州梅端真休寺の住持、癩症にて発すれば則ち乱言し、或いは自縊せんとす。且つ足彎急にして歩するに困めり。来りて治を請う。予 吐剤に非ざれば治せざる事を曉したるに、法類の人の阻むがために肯んぜず。他医の治を請う。其の医 四逆散加呉茱萸牡蛎を与うる事半年、寸効あらず。是に於て再び来りて予に請う。予 則ち瓜蒂・赤小豆の末・蠶汁を以て服せしむ。粘痰許多を吐して、癩復た発せず、足の彎急、頓に治したり。住持甚だ悦び、鄙振哥を読みて贈れり。

うもれ木の 花はさか子ど あしびきの  
やまいなきみとなるぞうれしき

斯の如き病を只だ一貼にして治する事は、他薬の能く及ぶ所に非ず。然るを世医の親しく試しもせず謾りに恐るるは、何事ぞや。予是を以て吐方の木鐸たらんと欲す。有志の君子は是を用いて疑う事なかれ。又、予 大津に在りし頃、予が専ら吐方を行いて効あるを見て、関潭斎なる者来りて瓜蒂の服法を問う。



予審らかに告げたりしかば、関子謝し去り、異日癩症の病客有りて三聖散を与えしに、須臾にして嘔気あり。尋で血一升半を吐す。関子 大いに驚き走り来りて予に謂いて曰く、『吐方考』に血症を吐する事を戒む、然るに今吐剤に依て血許多を吐す。是れ吾が診察の誤なりと自ら責めて大いに悔い、予に治法を問う。予も気の毒に思えども為ん方なくて、其の儘に捨て置きけるが、其の後関氏に途に逢いて問いしに、血は吐しかど病は全く愈えて害は少しもなかりしと語りき。其の後も血を吐しても妨ぐる所なく、病の愈えたる人を、まま見たり。又一病人 癩症にて、予 瓜蒂末八分を与えたるに、須臾にして吐す。翌日、又来りて告げて曰く、吐 未だやまず、と。予曰く、妨げなし。其の翌日、又来りて告げて曰く、吐 尚お未だやまず、と。予 答うる事始の如し。此の如き事五日、其の日の午時に至りて、吐纔に止まる。病人疲れて熟睡すること二日、病 全く愈えたり。彼是考え合わするに、古人の麝香を以て吐を止むるは、自ら止まるを待たざるものなり。毒 尽くれば吐は自ら止まる。又 毒 未だ尽くさずと雖も、薬力尽くれば、是れ又吐は自ら止むなり。